

(4) 自閉症者のための余暇支援のあり方研究

川崎医療福祉大学大学院医療福祉学専攻修士課程 ○野木 秀基
川崎医療福祉大学医療福祉学科 諏訪 利明

【要 旨】

余暇は、日本では文字通り「余った時間」であるが、欧米では Recreation (リクレーション) が「Re (再び) +create (創造する)」という語源から示されるように「元気回復のための行動」という意識が強く、働く人たちには必ず必要なものと解釈されている。重松は、「自閉症の人の中には、自由時間に何をして過ごしたらいいか分からずに混乱してしまう人がいる」と述べている。自閉症者は想像力の障害があるため、自由な場面では混乱や不適切な行動の原因となる。さらに自閉症者は余暇活動を行うためのスキルを自ら身につけることが困難であることから、余暇スキルを丁寧に教える必要がある。本研究では、成人の自閉症の人に対し、余暇支援の具体的な取り組みを通して、TEACCH の視点から自閉症者の余暇支援のあり方を検討することを目的とした。研究方法として、23歳の知的障害を伴う自閉症の男性1名を対象とし、自閉症スペクトラムの移行アセスメントプロフィール (TTAP) と余暇の評価

を実施した。その結果に基づく構造化された余暇プログラムを組み立て、8回の個別介入により経過を追った。評価として、25の活動の中からできると判断された活動 (以下、スキル)、興味関心の有無および笑顔の有無について評価した。その結果、特にスキルと興味関心が高いと判断された余暇活動について、次に自立的に取り組めるように個別介入を実施した。その際に、活動を課題分析し、自立的に取り組めるかどうか評価を繰り返した。自立に至らない部分については、再構造化を繰り返し、環境的な配慮を実施した。この結果、最終的に自立して取り組むことができるようになった。考察として自立的に余暇時間を過ごすためには①本人にわかりやすい構造を用意する。②本人のできることを中心に組み立てることが有効であり。また、再構造化のポイントとしては、①本人の興味関心を取り入れる、②本人が活動をより扱いやすいように設定することがあげられた。